

古田史学の会・東海

令和元年

東 海 の 古 代

第231号 2019年11月

会長 : 竹内 強

編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

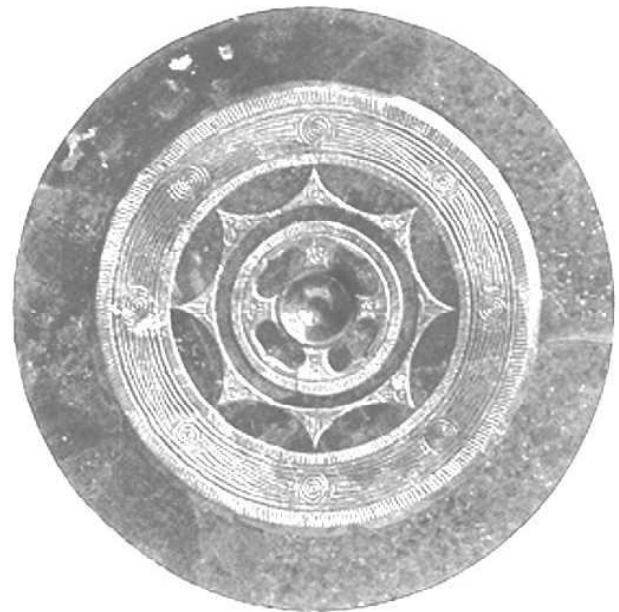
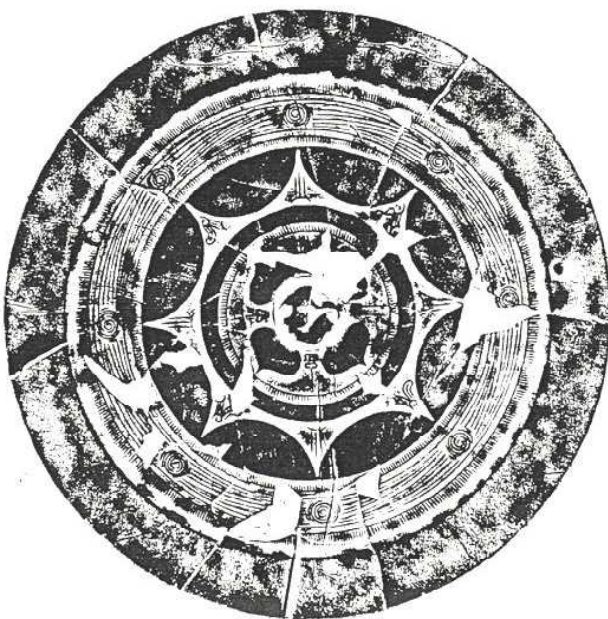
岐阜市の金華山山麓に眠る古代の大王

一宮市 畑田寿一

岐阜市の中央の長良川沿いにある金華山は織田信長や斎藤道三の居城の岐阜城がある地と知られ、長良川の鵜飼とともに多くの観光客が訪れるが、金華山の南に接する瑞龍寺山山頂遺跡については一般にあまり知られていない。

この地からは昭和41年の発掘の結果、後漢時代の内行花文鏡が出土した。内行花文鏡は九州の糸島半島の平原遺跡が有名であるが、瑞龍寺山山頂遺跡の鏡も同時代と考えられ、2世紀～3世紀にこの地に有力な豪族が存在していたことが伺われる。

しかし、なぜかこの鏡の存在もあまり知られていない。今回は少ない断片的な情報を集めて、弥生時代の岐阜市周辺の状況に迫ってみたい。



瑞龍寺山遺跡（左）と平原遺跡（右）の内行花文鏡

1 瑞龍寺山山頂遺跡の概要

岐阜市の発掘調査報告書では詳細な記録がなく、85年度版の年間調査報告書に6ページ程度の記録が残るのみであるが、その概要は次のとおりであった。

- ① 昭和41年に山頂部で「長宣子孫」銘の内行花文鏡（舶載鏡：22.1cm）1面と弥生式土器（後期中山式）が発掘された。鏡は割られており、その内側には「朱」が一面に付着していた。
- ② 昭和52年に再調査の結果、鏡が出土した東北部から岩盤を割り貫いた長方形の土壌がみつき、その中から碧玉製の管玉とガラス玉数個が見つかった。土壌は2カ所あり、土壌の方位は北から西に11度振れたものと北から西に48度振れたものであった。
（①の鏡は后者の土壌から発見されたことになる。）
- ③ 付近からは年代の下がる土器も発見されており、山頂付近は古墳時代に亘る墳墓群が形成されていた可能性が高い。
- ④ 山麓の東南の上加納遺跡からは享保年間（18世紀前半：徳川吉宗の時代）に銅鐸が出土しており、鏡と同じ頃に埋設されたものと考えられる。

2 周辺の状況

瑞龍寺山の南側や南西側には多数の弥生遺跡が発見されている。この地域は古くから住宅地であったため、再開発に伴いコマ切れに遺跡が発掘されているが、全体では数個の弥生集落群であった可能性が高い。

弥生集落の範囲は当初2km四方であったが、古墳時代には4km四方にまで広がった可能性がある。



3 国内の舶載内行花文鏡

内行花文鏡は三角縁神獣鏡に先立つ2世紀～3世紀に多く造られたが、2世紀にまで遡る舶載鏡は数少ない。

発見されている鏡の多くは、製造年代や舶載、倭製、仿製の区分について意見が分かれているが、次のものは2世紀に造られた舶載鏡である可能性が高い。

リストをみると、いずれの箇所も当時の交通上の重要拠点であった。

遺 跡	面数	状 況
平原遺跡（糸島）	7	大型の鏡を出土。この内の一部は倭製鏡か？
仲島遺跡（博多）	1	2017年に発見。長宣子孫の文字あり。
前田山遺跡（行橋）	1	倭製鏡の可能性あり。
御笠地区遺跡（筑紫野）	1	行橋から大宰府や基山方面に行く道筋にあたる。
朝田墳墓群（山口）	1	倭製鏡の可能性あり。
日枝荒神遺跡（出雲）	1	破片（2017/11）
石淵山遺跡（米原）	1	時代、舶載鏡の可能性ともに意見が分かれている。
瑞龍山山頂遺跡（岐阜）	1	割られていた。倭製とする説は無い

4 遺跡の構築時期

(1) 暦博の皆さんの年代認識

1996年、国立歴史民俗博物館が催した企画展の資料『倭国乱る』に依れば、瑞龍寺山と加佐美山遺跡（岐阜県各務原市）は2世紀前半で、平原遺跡とは時代的に少し先行しているとされている。

しかし、加佐美山遺跡は弥生時代中期から存続する遺跡であるが最盛期は3世紀と考えた方が妥当であり、瑞龍寺山遺跡は出土した中山式土器から2世紀後半とするのが妥当であろう。なお、同資料では同じ時代の遺跡として盾築遺跡（吉備）、小羽山遺跡（福井）が挙げられている。

(2) 糸島半島の平原遺跡の年代認識

平原遺跡からは大型（46.5cm）鏡を始め7面の内行花文鏡を出土している。

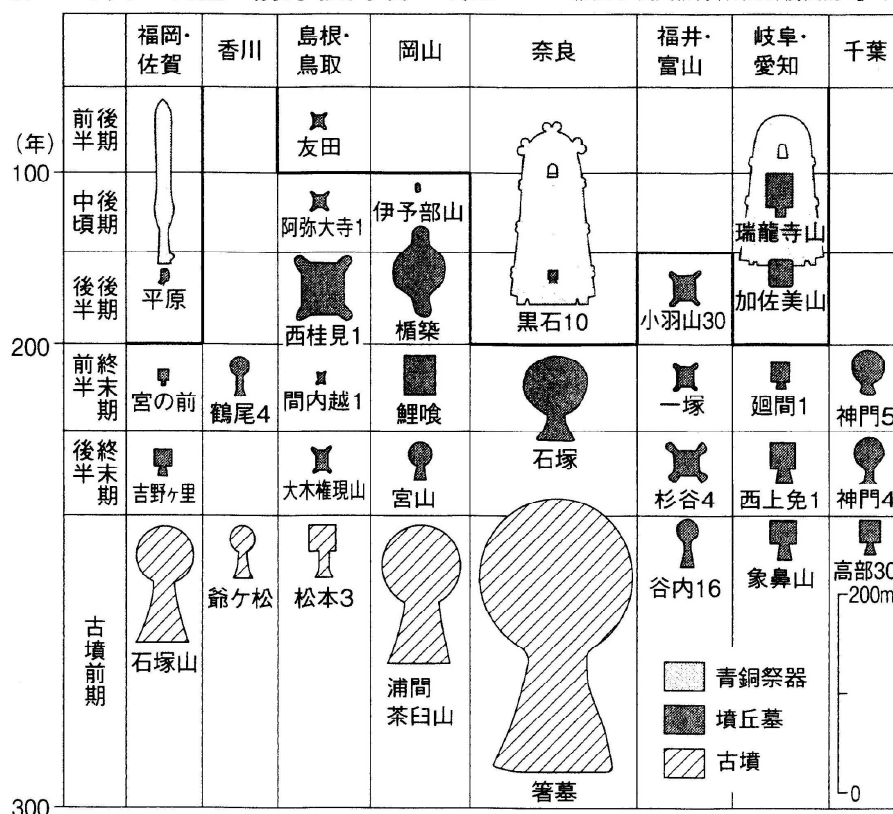
構築時期としては2世紀後半説と3世紀説に分かれ、3世紀説が現在では有力になっているが、依然として2世紀説を支持する研究者も多い。

平原遺跡は墳墓の近くの柱穴と遺跡の東方の日向峠結ぶ線から太陽を信仰の対象としていたと考えられているが、瑞龍寺山は北極星を信仰の対象としていた可能性が高く、異質の文化を持つ氏族であったと思われる。

上記から瑞龍寺山遺跡を平原遺跡の同じ2世紀とすると、尾張地方には萩原遺跡群（一宮市）、朝日遺跡（清須市）が存在し、近江地方には伊勢遺跡が存在する頃と同じ時代で、デルタ地帯に大規模な水田を擁した弥生集落が各地に存在した時代となる。なお、畿内では唐古・鍵遺跡、池上・曾根遺跡が中心で、纏向遺跡は未だ出現していない。

弥生時代の墳墓と前方後円墳の成立

(国立歴史民俗博物館編『倭国乱る』より)

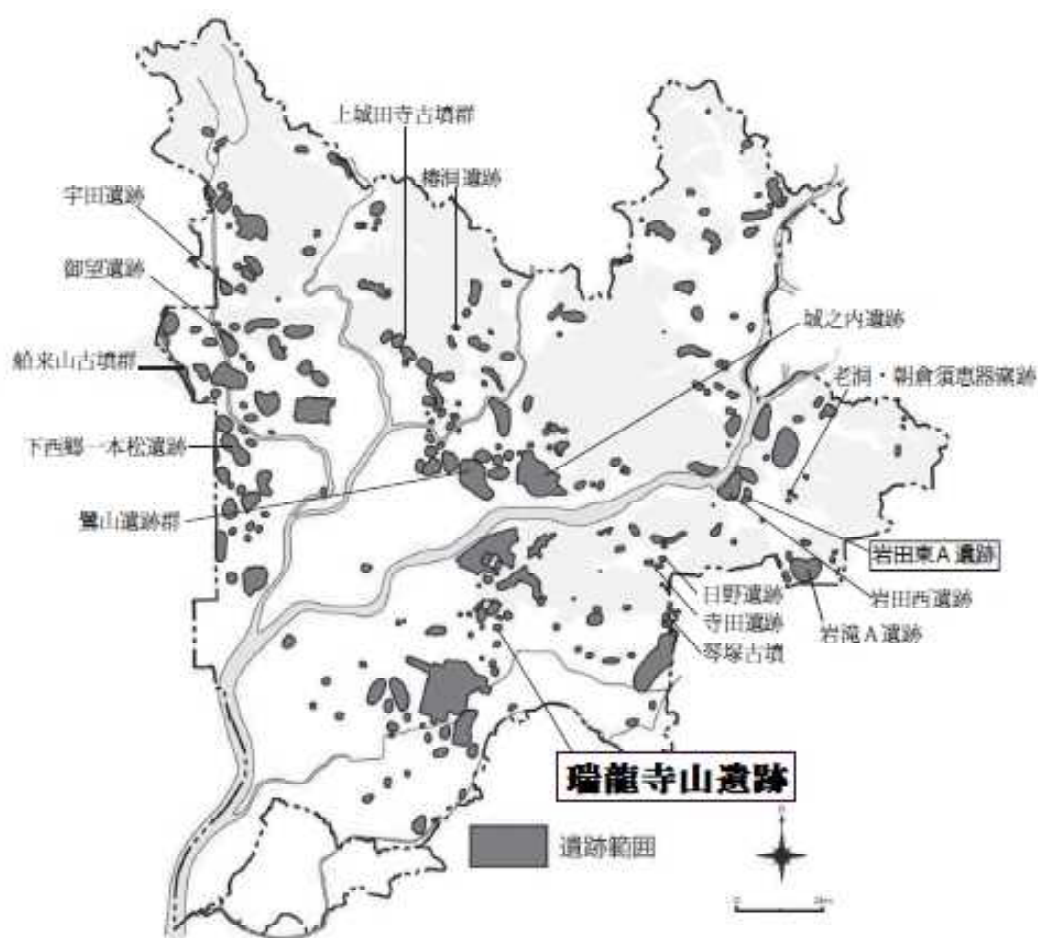


(出典：『倭国乱る』の企画展資料)

5 まとめに代えて

残念ながら集め得た史料では、大王の出身地、後漢や九州との関係を推察できる情報は入手できなかった。以降、筆者の推論を述べ、まとめに代えることとする。

- ① 2世紀にこの地の首長は金華山の南側に展開する湿地帯に花開いた弥生集落を纏めて大王となった。当時、木曾川は現在の境川まで北に湾曲しており、金華山麓から流れ込む荒田川を利用した稲作が盛んな地域であった。
- ② 弥生中期末の天候不順により各地の弥生集落が消滅する中、他の美濃の地域と同様、この集落は消滅せず古墳時代を迎えることとなる。
- ③ 山頂の棺が埋設されていた2つの土壇は、各々北から西に11度、48度振った方向であったと報告されているが、前者は当時の北極星、後者は冬に積雪が輝く能郷白山の方向になり、いずれかの信仰に由来すると考えられる。
- ④ この地は物部氏の勢力が強く、大半の国造や県主は物部氏であるが、手力雄神社などニニギノミコトを祖とする神社も多数あることから、日本海側からの人の流れも無視できない。
- ⑤ 3世紀後半から4世紀に入ると長良川北部の丘陵地に集落が広がり、城之内遺跡、鷺山遺跡などが造られた。
- ⑥ 同時に東側にも集落が広がり、中心は各務原市との境付近となった。当時の遺跡としては岩田遺跡、加佐美山遺跡などが挙げられる。
一般にはあまり着目されていないが、岐阜市は全国的にみても遺跡の多い地域であり、弥生・古墳時代を通して文化の中心地であった。



岐阜市付近の遺跡分布

(出典：岐阜市埋蔵文化財調査事務所)

- ⑦ 4世紀に入るとヤマトとの関係も緊密になり、箸墓古墳に大量の尾張地方の土器が存在する原因にもなった。(「東海の古代」229号で論考)
 前述の岩田遺跡付近には彦坐王(開化天皇の子、崇神天皇の異母弟)の墓(宮内庁比定地)があり、景行天皇の後の八坂入媛命(美濃出身：成務天皇の母)などの説話がその東方の泳宮(くくりのみや：可児市)に残っている。彦坐王は丹波地方での活躍が有名であるが、晩年は美濃で過ごした可能性が高い。
- ⑧ このあたりの状況が実証できれば、猿投山付近にいたとする大碓命(大和武尊の兄)の存在や、断夫山古墳(名古屋市熱田区)が日本武尊の妃の宮簀媛(みやすひめ)の墓とされていることにも繋がり、ヤマトと尾張・美濃との関係がより明らかになる。

筆者は先回の「東海の古代」229号の美濃の船来山遺跡とヤマトとの関係で「**纏向遺跡と船来山遺跡の人々はおおいに交流を図っていた。**」とする論考を示したが、瑞龍寺山遺跡はこれ先立ち美濃で王権が成立した場所であり、美濃・尾張の発祥の地と考えてよいのではなかろうか。

「百嶋神社考古学」からみる古代の伊豫国（第二～五章）

安城市 山田 裕

第二章 『御鎮座本縁』が記す第七代孝霊天皇の御代に起こった国内の動乱

『社記』、『年譜考』は、「孝霊天皇の御代に天候不順による五穀が実らず万民が愁い苦しんでいるのを哀れみ、齋戒沐浴して天神地祇に祈った。」としているが、『御鎮座本縁』は、「**天下穏やかならず、順はざる民多く叛く**。茲に因りて、天皇、大己貴神に盟ひ、天下平らかに国民順はしめんことを祈り給ふ。云々」としている。

この国内動乱について、『記紀』に該当する記事はないが、『魏志』倭人伝は倭国の動乱記事を記述している。また故百嶋由一郎氏は講演会の中で、倭国の動乱について言及している。

『魏志』倭人伝並びに故百嶋氏の講演録から、倭国の動乱を検証する。

1. 『魏志』倭人伝

（『新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』石原道博編訳、岩波文庫）

(1) 倭国乱れる

「その国、本また男子を以て王となし、住まること七、八十年。倭国乱れ、相攻伐すること**暦年**。」

故古田武彦氏は『邪馬一國への道標』（角川文庫81～82頁）で、「暦年」の用例を調査して、「暦年」とは、おおよそのところ、“七、八年くらいの間”とし、また戦乱の時期を魏代（後漢の滅亡、220年）内のこととしている。

① 戦乱期間（暦年）－ ②「即位～遣使」期間－ ③ 遣使（景初二年、238年）

②の期間を“それほど長い期間ではない”としている。

故古田氏の説に従い、②の期間はおおよそ3年ほどとすると、①の期間は

$$238\text{年} - 3\text{年} = 235\text{年}$$

235年から7年～8年以前、すなわち227・228年～235年ごろと推測される。

(2) 狗奴國との闘い

「その八年（正始八年、247）、太守王?官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴國の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹掾張政等を遣わし、因って詔書・黄幢を齎し、難升米に拝仮せしめ、檄を爲りてこれを告諭した。卑彌呼以て死す。」

卑彌呼の死因とその時期は明らかでないが、おそらく、国を治められないことを恥じ、かつ狗奴国との和平実現ために自ら死を選んだと考えられる。その時期は正始八年から一年以内、247～248年と考えられる。

(3) 卑彌呼死後、男王が立ったもののさらに戦乱が広がる。

「卑彌呼以て死す。大いに冢を作る。径百余歩、徇葬する者、奴婢百余人。更に男王を立てしも、國中服せず、更々相誅殺し、当時千余人を殺す。また卑彌呼の宗女壺与年十三なるを立てて王となし、國中遂に定まる。」

卑彌呼の宗女壺与が王となった年は、文面からは明らかではないが、『晋書』卷九七四夷伝・倭人条の下線部を引用して、「泰始初」を泰始元年（266）とし、壺与が魏の後継国である晋に貢献したとする説がある。

「宣帝之時平公孫民也其女王遣使帶方朝見其後貢聘不絕及文帝作相又數至泰始初遣使重譯入貢」

西晋は司馬炎によって建てられた王朝（265～316年）で、「宣帝・文帝」は司馬炎によって、追諡された「帝号」であり、正しくは倭国から魏への朝貢記事である。「泰始初」の記事には、女王の記述がないので、壺与の即位年代は不明である。

「宗女」とは、本流の血筋をひく女性と考えられるが、卑弥呼は独身なので子がいるはずもなく、男弟王あるいは男弟王の子供の直系女子が該当すると考えられる。

2. 「神々の系図」

同系図や故百嶋氏の講演録によると、

(1) 倭国乱れる

故百嶋氏は『魏志』倭人伝記事について、何十年かのことをごちゃまぜにして圧縮して書いているので、そのまま信じると間違えてしまうと述べられている。「倭国乱れる」の実態については、以下の歴的段階を指摘されている。

①九州王朝前夜（神武天皇即位前、故百嶋氏は天皇ではなく君長と呼ばれた）

『記紀』が記す「ヤマタノオロチ退治神話」の実態は、ヤマタノオロチを越智族の統領大山祇神、アシナズチ・テナズチ夫妻は金山彦・埴安姫とし、実際の舞台は出雲ではなく九州遠賀川流域で、百年戦争と述べられている。この戦いを調停したのがスサノオとしていいる。その後、神武天皇は有力部族である昔氏・瀛氏・白族・越智族・許氏・多氏によって九州王朝の君長に推戴された。

②神武天皇の御代

スサノオと櫛稲田姫との御子長髓彦が反乱を起こした。この反乱を早期に終息させた功労者を阿蘇「多氏^{注4}」の統領吉見神（亦の名天忍穗耳命・天児屋根命・級長津彦・大年神・安日彦・海幸彦など多数）としている。

「神々の系図」による長髓彦の系譜は、昔氏^{注5}のイザナギと瀛氏のイザナミ（金山彦の妹の間に生まれたのが、“天日命（日本名スサノオ）”である。スサノオは朝鮮半島から九州へ進出し、櫛稲田姫（金山彦の娘）という高貴な女神との間に生まれたのが長髓彦（亦の名岐神）である。

*注4 「多氏」

Wikipediaによれば、皇別氏族屈指の古族であり、神武天皇の子の神八井命の後裔とされるが確実なことは不明。多氏はヘブライ系苗族系民族の王で、雲南省麗江から海南島へ移動後、黎族と名を変え、琉球を経由して紀元前に熊本県天草諸島の下島にある苓北町に上陸した後、阿蘇に進出後は「耳族」と呼ばれるようになった。

神沼河耳命について、『記紀』は神武天皇の嫡子、後の綏靖天皇としているが、故百嶋氏は多氏の統領と述べられている。

「神々の系図－平成12年考」には、神沼河耳命の父母に関する系譜が記されていないのは不審だが、明らかにできない理由が存在したと考えられる。

神沼河耳命の後は、イザナギとイザナミの間の御子「神俣姫」である。二人の間の嫡子の若き頃の名は草部（かやべ）吉見と云い、阿蘇高森の草部吉見神社に日子八井命の名で祭神として祀られている。またの名に、天忍穗耳命・天児屋根命・海幸彦・級長津彦（志那津彦とも表記）・安日彦・大年神・武甕槌命・春日大神などがある。

神社によっては、草部吉見神のまたの名をいくつも重ねて祭る神社が散見できる。例えば、下総国一宮の香取神宮は「経津主大神・武甕槌命・天児屋根命」を祀り、春日大社も同様である。藤原氏の先祖にあたる中臣氏の氏神は「武甕槌命」であり、中臣連等の祖神

・大中臣の祖神は天児屋根命である。大中臣氏は伊勢皇大神宮の祭主すなわち大宮司を務める家柄でもある。

大年神・天忍穗耳命を祀る神社は全国にみられ、天児屋根命・春日大神・武甕槌命・経津主神は大神社で祀られており、初期九州王朝を強力に支え、後に神として崇められた。草部吉見神は、神武天皇を政治・軍事面で支えた。故地（雲南省志那郷）に因む名が「志那津彦」である。

多氏の統領草部吉見神が東遷後、弟の**手研耳命（またの名建盤龍命）**が「**阿蘇族**」の統領となり、**懿徳天皇の後アソツ姫を略奪するなど各地で暴れまわり、卑弥呼・懿徳天皇政権を混乱させた。**

＊注5 「昔氏」

『三国史記』新羅本紀によれば、朴氏・昔氏・金氏の三姓の王系があった。当時の国名は「斯羅あるいは斯盧」と呼ばれ、中国宋代初期に成立した類書の一つである『太平御覧』に、

「**斯羅國、本東夷辰韓之小國也。魏時日新羅、宋時日斯羅、其實一也。或属韓或属倭。国王不能自通史聘。普通二年（521）其王名慕秦（法興王）、始使随百濟秦表獻方物。其國有城、號日建年。其俗與高麗相類。無文字、刻木爲範。言語待百濟而而後通焉**」と記されている。

故百嶋氏は、上記三姓をいずれも**匈奴系**とし、その末裔である**新羅第九代伐休尼師今（日本では伊弉諾尊）**が后イザナミと共に、アマテラスの要請により渡来し、王子天日槍（日本では素戔鳴尊）はそれより前にアカル姫を追って渡来した。その時期は2世紀中ごろ以前と推測される。

『三国史記』新羅本紀によると、第九代伐休尼師今の在位は184～196年となっており、「神々の系図－平成12年考」と比較すると、約100年の乖離がある。同書は新羅門閥出身の金富軾によって書かれたもので、新羅の建国を紀元前57年とし、高句麗の建国は紀元前37年とするなど、新羅に偏った編纂姿勢は東アジア史・中国史の専門家からも強い疑念が提起されており、比較対照すること自体が無意味かもしれない。

故百嶋氏は、朝鮮民族が大挙して朝鮮半島に進出したのは4世紀のことで、それまでは現在の重慶に定住していたと述べられている。

Wikipediaによれば、晋の建興元年（313）、遼東半島へ進出した高句麗が南下して楽浪郡を占領すると朝鮮半島南半に孤立した帯方郡は、晋の手を離れ情報も途絶した。このような状況下を奇貨として、朝鮮族は重慶から一路朝鮮半島に進出し、その一派である新羅が西暦356年新羅国を建国した。したがって、金海伽耶国を構成したトルコ系匈奴出身の「斯盧国」の後継国が、朝鮮族の「新羅国」であるはずもない。中国側の歴史家も同様の見解をとっている。

本論に戻すと、**故百嶋氏は、伽耶国（現在の大邱付近）の王伐休尼師今ことイザナギが日本列島に渡来した理由をアマテラスに日本の統轄を依頼された**としている。驚愕すべき内容である。匈奴部族である大山祇と瀛氏金山彦の根深い対立抗争の調停を期待した面も否定できず、后イザナミ（金山彦の妹）も同行したと考えられる。

イザナギの嫡子スサノオは、父イザナギよりも早い時期に日本海側の但馬国に渡来し、因幡・伯耆・出雲・石見国へと移動した。と同時に、大幡主の王女で、当時金海伽耶国に滞在していた白玉の女神阿加流姫を追い、但馬・摂津を経て国東半島対岸の姫島を経由してようやく、小郡市の七夕神社（別名姫社神社）で后に迎えることに成功し、神大市姫こと罔象女が生まれた。新羅第四代の王脱解尼師今（在位年代57～80年）は、『三国史記』

新羅本紀・脱解尼師今紀によると、倭国の東北一千里のところにある多婆那国（熊本県玉名市付近か）の出身。

（2）狗奴国との闘い

長髓彦の乱の終結後、ほどなくして発生したのが狗奴国の乱で、**首謀者は越智族の大山祇神**で、この乱を終息に導いた功労者も草部吉見神（亦の名海幸彦）である。乱の首謀者大山祇神の息子である大己貴神は責任を問われる立場にあったが、不問に付されたようである。

その後、大山祇神は九州を去り、おそらく大三島へ渡ったと考えられる。

（3）卑弥呼退位後に起こった戦乱

第二代の懿徳天皇の后天豊津姫を略奪したのが阿蘇「多氏」庶流の手研耳命（亦の名建盤龍命）である。天豊津姫は略奪された後の変名が阿蘇津姫で、父は阿蘇「多氏」の統領草部吉見、母は高木大神の娘拷幡千々姫で、高貴な女神にふさわしい系譜を有している。阿蘇津姫を担いで手研耳命は各地で暴れまわり、懿徳天皇は重なる大失態を恥じて退位し、卑弥呼が復権したものの、天忍穗耳命（＝海幸彦）とスサノオと櫛稻田姫の王女瀛津世襲足宇姫（＝武内足尼）の御子建御名方が熊襲と呼応して、第二次狗奴国の乱を起こす。反乱が鎮圧された後、卑弥呼宗女壺与が13歳で後を継ぎ、懿徳天皇の皇子孝霊天皇の後となった。

（4）孝霊天皇の御代

『御鎮座本縁』が記す**孝霊天皇の御代に起こった国内動乱の真相は、建御名方の乱であった**と考えられる。

第三章 『御鎮座本縁』、『社記』、『年譜考』からみる古代の伊予

1. 『御鎮座本縁』

「八代日本根子国牽天皇（孝元天皇）御宇、彦狹男命、神託に依りて、大山積皇大神を伊豫国遠土宮⁽¹⁾に祝祭り給ふ時に、二名国分彦（2）参り会へり。親王の間ひて曰く、汝は何と云ふ人ぞ、答へて曰く、吾れ伊予津日子の末、風早国分彦命（2）と申す。吾は元大山積の裔なり。君、二名州（3）を治め給ひて（中略）ŽŠo(, Ē, ^a, Ī, -)庶幾は汝と与に家を合はせ、國を治めんと思ふとžH(, Ī, ½, Ū)曰ひて、國分姫を妻として小千命を生み給ふと云々。」

（1）遠土宮

同宮は、越智族を称えた通り名と考えられる。

（2）二名国分彦と風早国分彦

二名国分彦こと風早国分彦は、自らの来歴を伊予津日子の末、大山積の裔と称している。「末」は直系の子孫、「裔」は血筋をひくの意である。

（3）二名州^{ふたなのみくに}

同国が何処にあるかは不明。

2. 『社記』

「十代崇神天皇御宇七庚寅年春二月（中略）

天皇問曰、其面足・倭根尊・大山祇神、宮殿在何處耶（1）。答曰、在二名洲之内滄海

四周可怜三島之小汀矣。(中略)彦五十狹芹命發_レ路到_二吉備國_一、?誅_二西国荒戎_一。又師_二船師_一發_二吉備小島_一而到_二二名州_一、風早浦起_二行宮_一以居_レ之。是謂_二遠地宮_一。今在于風早浦國津彦神社(2)(中略)五十狹芹命見問曰、汝誰也。對曰、臣是地神大山祇裔伊豫津彦子名風早國分彦。(中略)彦五十狹芹命甚悦日、汝庶幾爲_二戮力_一、一心祭_二大神_一能理_レ國耶。對曰、奉仕矣。由以_二國分彦_一爲_二導入_一渡_二瀬戸之浦_一、敬_一祭_二三島大神_一。然後歸_二于風早浦_一、建_二宮室_一而留住。且ク敬_一祭_二太神_一。遂娶_二國分彦女和氣姫_一爲_レ妃、生_二小千命_一。書曰、以_二國分彦_一爲_二國導_一平_二南國荒戎_一。然後館造_二伊豫神崎郷_一住給布。故號_二伊豫皇子_一。

(3)(中略)同御宇(十代崇神天皇)十七庚子年夏、以_二彦五十狹芹命男小千命_一(4)定_一賜_二名國造_一而爲_二三島太神祭主_一。于_レ時年七歲。及_レ長造二館於當國大濱郷_一住焉。是越智始祖也。」

下線部について、

(1) 二名州

船で吉備の小島(現在の児島半島)を出発し、二名州に到着したとあり、現地の地名、風早浦・瀬戸之浦より、**大三島周辺が二名州**と考えられる。

(2) 遠地宮

二名州内の**大三島の狹小な波打ち際に立地**。

遠地宮を注で、「今風早浦の國津彦神社」とあるが、同社は旧北条市内にあり、大三島とは隔絶し、加えてご祭神に大山祇神・草野姫・大己貴が祀られていないので、混乱した記事と考えられる。

風早浦を遠地宮とする論者もいるが、彦五十狹芹彦命こと孝靈天皇第三皇子吉備津彦が風早浦に帰って、自らの宮室を建てたとするのが素直な解釈ではあるまいか。

(3) 風早國分彦

本文は、伊豫津彦の子で、五十狹芹命の与力として仕えたとあるが、一書には、国を導き、南国の荒戎を平定し、その後、伊豫神崎郷に館を建て、居住したことにより、伊豫皇子と名付けられるとある。

伊豫郡神崎郷は現在の伊予郡⁴ ‘0(, ü, ³, <)松前町周辺で、大三島とは隔絶し、風早國分彦と伊豫皇子を混同した記事と考えられる。

(4) 小千命

崇神天皇十七年に、七歳で二名国造を賜り、また三島大神の祭主となり、長ずるに及び、大濱郷に館を建て、其処に住んだとあり、越智族の始祖とされている。今治市大浜町の**大浜八幡神社は「越智氏族発祥の地」と伝えられている**。小千命はその名が示す通り、越智族の祖大山祇神の系譜につながる人物と考えられるが、風早國分彦との関係は不明である。

* 下線部大浜八幡神社

主祭神：乎致命

配祭神：饒速日命・天道日女命・市杵島姫命・仲哀・応神天皇など

由緒によれば、「乎致命、東予地方を開拓し、郷土繁栄の基礎を築いた神で、越智・河野・矢野・村上氏等百有余氏の祖」とある。

3. 『年譜考』

「十代崇神天皇御宇、天皇神教を得て天神地祇を敬祭り玉ひ、同拾年十月丙子曰、孝靈天皇第三皇子彦佐男命(1)を以て西南道將軍と爲し、又依_二神託_一、詔して二名州=(2)

所在三嶋大神の祭主となし玉ふ。此時西寇乱をなす。彦狭男命卒兵て吉備国に至り尽く誅之。(中略)時に有_二一老人_一、其前_二詣_一、彦佐男命見問曰く、汝誰や。対曰、臣是地神大山積神之裔、伊予津彦子、名は風早国分彦(3)ともふす。(中略)宮殿を建て留り住玉ひ、国分彦女和気姫を妻と為し、小千命ヲ生玉ふと云々。越智_二小千後作_一。(中略)同御宇十八辛丑年夏、詔して小千命を以て封_二伊予國造_一、三嶋大神の祭主(4)となし玉ふ。」

下線部の要旨について

(1) 孝靈天皇第三皇子彦佐男命

孝靈天皇の第三皇子について、『記』は、母が意富夜麻登玖邇阿礼比売の命で比古伊佐勢理?古の命、亦の名は大吉備津日子の命、『紀』では、母がハエイロネで彦狭嶋命・稚武命とし、吉備臣の始祖としている。

彦佐男命を西南道将軍と記している点について検証すると、中国の史書『魏志』倭人伝、『後漢書』倭伝、『翰苑』卷三十、『梁書』卷五四諸夷伝の行路記事から、倭人の国「倭国」が九州内を示している。狭義には福岡県内であることは前述した。九州から見て、吉備国への道路を西南道とするのは首をかしげざるを得ない。「倭国」を大和に見立てたとしても山陽道が相応しい。

筆者は『紀』との整合性を図るため、「西南道」という造語を用いたと考えられる。

(2) 二名州

『「記」の島生み神話に現在の四国を「伊豫の二名島」としている。

彦狭男命の行動領域は、大三島周辺である。したがって、吉備津彦が統治支配したとする二名州はその行動領域に一致すると考えられる。大三島周辺とする二名州は、吉備国と比較するとあまりにも狭小地域で、彦佐男命が統治支配する国としては不釣り合の感をそぐえない。また伝承を矮小化するおそれもある。

そのため、二名州の地を誇大化する必要に迫られ、引用されたのが『記紀』が記す「島生み神話」で、本来の大三島周辺に代えて、四国全体を表象する「伊予之二名州・伊豫二名州」を引用したと考えられる。したがって、「二名州」は本来の国名ではない可能性がうかがえる。

(3) 風早国分彦

大山積神の裔で伊予津彦の子とあるが、その名が示す通り、「風早」は旧北条市周辺で、國津彦神社の由緒には大山積神との関係が見いだせない。また伊予津彦を祀る神社は、風早國分彦を祀ってはず、由緒にもみえない。

(4) 小千命

初代伊予國造とあるが、『先代旧事本紀一國造紀』にその名はみえない。

4. 「神々の系図」

孝靈天皇の第三皇子を『御鎮座本縁』が彦狭男命、『社記』が彦五十芹命、『年譜考』が彦佐男命とし、微妙に相違している。

「神々の系図」によれば、**孝靈天皇の第一王子は孝元天皇、第二皇子は伊予皇子、第三皇子は桃太郎と崇められた吉備津彦、第四皇子は吉備武彦**としている。

他方、『記紀』は第三皇子をそれぞれ日子刺肩別の命、彦狭嶋命と記している。

『社記』が記す彦五十芹命は孝靈天皇の第二皇子である伊予皇子を指し、『御鎮座本縁』、『年譜考』は孝靈天皇の第三皇子吉備津彦を指していることが確かめられる。

第四章 『先代旧事本紀一國造本紀』(60p) からみる伊予の古代

同書は平安時代初期に撰せられ、伊予国が五か国に分割されている。

- ・小市國造 応神天皇御代、物部連同祖大卿川命孫子到命
- ・伊余國造 成務天皇御代、因幡國造（彦坐王兒彦多都命）同祖敷桁波命兒速後上命
- ・久味國造 応神天皇御代、神祝尊十三世孫伊與主命
- ・怒麻國造 神功皇后御代、阿波國造（高皇產靈尊九世孫千波足尼）同祖飽速玉命三世孫若彌尾命
- ・風早國造 応神天皇御代、物部連祖伊香色男命四世孫阿佐利

小千（越智）國は越智族の祖大山祇神から始まり、代々越智氏がその系譜を継ぎ、他方伊余國は孝靈天皇の第二皇子伊予皇子から始まり、代々伊予皇子の系譜を継いだと考えられる。

私はかねてより同書には懐疑的である。というのは、松山市久米の「久米官衙遺跡群」で発見された須恵器に「久米評」という文字が刻まれていたからである。

「久米評」は「伊予国」に置かれた評である蓋然性が高い。

同様の例に奈良県明日香村の「石神遺跡」から発見された木簡に「三川穂評穂里穂部佐」とあり、「穂評」は「三川国」に置かれた評である蓋然性が高いにもかかわらず、同書では「穂國」と記載されている。

したがって、考古学的遺物から「久味國造」の存在は疑問であるといわざるを得ない。また、宝賀寿男氏は『越と出雲の夜明け』（法令出版、61～73頁）で、同書が記す「加我國造・加宜國造・高志國造・高志深江國造」の存在に疑念を呈されている。

さらに、久味・怒麻・風早國造の系譜はあまりにも長く、本当のところはよくわからず、単に守備隊長である物部氏の拠点を「国」と記述したのではなかろうか。

『和名類聚抄』（平安時代中期の承平年間（931～938年）勤子内親王の求めに応じて、源順が編纂した辞書。）によると、伊予国には以下の14郡が置かれていた。

宇摩郡・新居郡・周敷郡・桑村郡・越智郡（大三島、伯方島、大島を含む）・野間（濃満）郡・風早郡・和気郡・温泉郡・久米郡・伊予郡・浮穴郡・喜多郡・宇和郡

上記の五か国に対応する郡は、以下のように考えられる。

小千國＝越智郡、伊余國＝伊予郡、久味郡＝久米郡、怒麻國＝野間（濃万）郡、
風早國＝風早郡

いずれも愛媛県の東予地方・中予地方に偏在し、南予地方には国がみられない。さらに不思議なのは、東予地方の宇摩郡・新居郡・桑村郡も同様に国がみられない。次に、各郡で祀られた神々を探りたい。

第五章 各郡が祀る神々

14郡内のうち、宇和郡を除く各郡の一宮及び主要な式内社（尊敬するブログ”玄松子”を中心に作成）が祀る神々を探ると次の表のとおりである。

表3. 各郡が祀る神々

郡名	神社名	ご祭神	区分
宇摩	村山神社 (通称、長津宮)	現在は天照皇大神だが以前は大山積神・大己貴命・武國凝別命。また天兒屋根命とする説もある。	名神大
新居	伊曾乃神社	伊曾乃神、天保年年間に編纂された西条藩の郷土地誌『西条誌』では、天照大神と武國凝分命としている。	名神大
	黒島神宮	大山祇神・木花咲耶姫命・天之御仲主	県社
桑村	布都神社	布都主神（＝経津主神）	村社

	周敷神社	中央殿は 天火明命 、左殿に 大山祇神 、右殿に 大己貴神	県社
	保内八幡神社	応神天皇・神功皇后・仲哀天皇・市杵嶋姫・湍津姫命・田心姫命・武内宿禰。 境内論社の周敷神社は國常立命・天火明命	郷社
	宮内神社	大山祇神・高神・雷神 ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊	郷社
越智	伊加奈志神社	伊豫国総社。 五柱命・五十日足彦・伊迦賀色許男命 。『神名帳考證』では物部伊香我色雄命	名神大
	大浜八幡神社	乎致命・彦狭嶋命 。応神天皇の御代、物部連の同祖大新川命の孫乎致命	村社
	大須伎神社	少那毘古那命・阿遲鋤高日子根命・伊弉冉・熊野忍隅命（＝熊野久須毘命）	村社
	大野神社	大山積命・上津姫命・下津姫命	村社
	樟本神社	スサノオ 。近世までは牛頭天皇社とも呼ばれ、鎮座地も八町字天皇とも呼ばれていた。『伊豫二名集』では社名から“木の種”→ 五十猛神	村社
	姫坂神社	市杵嶋比売命 。『神名帳考證』では、屋船豊宇気姫（＝ 豊宇気姫 ）	村社
	大山祇神社	面足・倭根命、大山祇神・大己貴命	名神大
	多伎神社	多伎都比売命・多伎都比古命・スサノオ命	名神大
野間	野間神社	饒速玉命・若彌尾命・スサノオ命・野間姫。『三代実録』に 野間天皇神（＝草野姫）	名神大
野間	野間神社	『伊豫国神名帳』に濃満天皇神	名神大
風早	國津彦神社	天照國照天火明櫛玉速日命・宇麻志麻治命・物部阿佐利命・誉田別命	県社
	櫛玉比賣神社	天道姫命	郷社
和気	阿沼美神社（平田町）	大山祇神・月讀神・高?神・雷神	名神大
温泉	阿沼美神社（味酒町）	大山積命・高?神・雷神・味耳命 。合祀： 面足神・倭根神・神八井尊	名神大
	湯神社	大己貴命・少彦名命・スサノオ・稻田姫命	県社
	伊佐尔波神社	誉田別尊・足仲彦尊・気長足姫尊・市杵島姫命・湍津姫命・田心姫命	県社
久米	日尾八幡神社	西玉殿：品陀和気命・帶仲日子命、中玉殿： 多紀理毘売命・狭依毘売命 、東玉殿：大帶姫命（＝神功皇后）西玉側玉殿：健内宿禰命、中玉殿： 伊予比売命・饒速日命 、東玉側玉殿：猿田毘古命（＝饒速日命）	県社
伊予	伊豫豆彦命神社	伊予豆比古命・伊予豆比売命・伊與主命・愛比売命	名神大
	伊豫神社（松前町）	伊予津姫命・日本根子彦太瓊命（＝孝靈天皇）・細媛命・速後上命	
	伊豫神社（伊予市上野）	月夜見尊・愛比賣命・神八井命・速後上命	名神大
浮穴	浮嶋神社	浮嶋神（可美葦牙舅尊・伊弉諾尊・伊弉冉尊） 主祭神は 可美葦牙舅尊	県社
喜多	三島神社	大山積見神・雷公神・高?神・ 主祭神は 大山積見神	

注) 赤字は主祭神

表3に掲げる神々のうち、以下に記す神々を『記紀』『先代旧事本紀』並びに神社誌、故百嶋由一郎氏が作成された「神々の系図」を参考に探求すると、

(1) **武國凝別命**

『日本書紀一景行天皇紀』では、景行天皇と高田媛との間の皇子。『旧事本紀一天皇本紀』も同様の記述で筑紫水間君の祖とある。「神々の系図」によれば、父は御年神（父は志那津彦、母は志那津姫）、母は古許牟須姫（父ニニギノミコト、母木花開耶姫）との間に誕生し、**筑紫水沼君の祖・御村別の祖**としている。**別称伊曾乃神**とも呼ばれた。

(2) **天火明命**

「神々の系図」によれば、亦の名を、天児屋根命、天忍骨命、天忍穗耳命、山幸彦、建雷神が、経津主神、五十猛神、鹿島大神、級長津彦、**饒速日尊**等とも呼ばれる。

(3) **國常立神**

『記』は天神六代、『紀』では、天神初代の神。神仏分離令により、各地の妙見社はご祭神を國常立神から天之御中主に改めた。「神々の系図」も**天之御中主**としている。

(4) **高皇神**

『紀』は、イザナギが迦具土神を斬殺した際に化生した三柱の一つ。『記』では、淤加美神と記す。「?」は「龍」の古語であり、「閼?」は「谷間を流れる急流」、「高?」は「山の上から流れ出る滝」を意味することから、いずれも〈水や雨を司る神〉とされている。伊予市双海町の三島神社は「大山積命・雷神・高?神の三座を祀り、大山祇神社境内摂社の上津社は雷神、下津社は高?神を祀っているが、いずれも同一神の可能性がうかがえる。「神々の系図」によれば、**高皇神を神八井耳命**としている。

(5) **五十日足彦（いかたらしひこ）**

『記』は、垂仁天皇と苅羽田刀弁の御子、『紀一垂仁紀』では、垂仁天皇と苅幡戸辺の御子と記されている。五十日足彦を祀る神社は、愛媛県・福井県・新潟県に存在する。上越市三和区の五十君神社はご祭神を五十日帯彦命としているが、『神名帳考證』所引の「越後国式社考」は級長津彦・級長戸彦とし、「北越後風土記節解」は、五十猛神・木種大明神、「頸城郡誌稿」は、五十日足彦命・木種大明神と記している。したがって、**五十日足彦は、級長津彦・五十猛彦と同一神**であると考えられる。

(6) **伊予豆比古命（＝伊予津彦命）**

「神々の系図」によれば、孝霊天皇と皇后細姫との間の皇子で、兄は孝元天皇である。伊予地方に進出したのは、3世紀半ばごろと推測される。伊予津姫命は妻と考えられる。

(7) **愛比女命**

伊予市上野町の伊豫神社のご祭神である愛比賣命は月夜見尊と対応し、伊豫豆彦命神社のご祭神である伊與主命と愛比売命が対応している。したがって、**伊與主命は大山祇神、愛比売命はその妻草野姫**（亦の名埴安姫）が相応しいと考えられる。

表3より、以下の歴史的段階がみられる。

第一段階

越智族の祖である大山祇神は、妻草野姫を伴い、越智族を率いて二世紀半ば過ぎに、大三島、大島・伯方島の島嶼部を含む東予地方に進出後、中予から南予地方にまで支配を広げたが、その後**越智族は東予地方に土着**したと考えられる。

第二段階

越智族進出後、四半世紀を経て東予地方の**西条市周辺に天之火明命が進出**したと考えられる。「神々の系図」によれば、饒速日尊と天火明命は同一人物と指摘しているが、中予地方の人々はあくまで「天火明命」を奉斎している事実注目すべきであろう。この事実立脚すれば、風早国の國津彦神社が饒速日尊を奉斎しているのは奇異に感じる。同社を

創祀奉斎した物部阿佐利の系譜は長い時間が経過しており、饒速日尊の直系の系統ではなく、おそらく、物部阿佐利は守備隊長の一人であったと考えられる。

第三段階

孝霊天皇の第二皇子で、孝元天皇の弟伊予皇子は伊予国平定のため、豊前から宇和へ進出後、現在の伊予市・伊予郡松前町を経て松山市に定着した。その時期は3世紀半ば以前と考えられる。

第四段階

孝霊天皇の命を承け、水沼君の祖武國凝別が同天皇の第二皇子伊予皇子支援のために派遣された。武國凝別は現在の西条市～四国中央市付近で伊予皇子の守備隊長として君臨したと考えられる。

おわりに

もうおわかりであろう。「二名州」の本来の国名は「越智国と伊予国」であった。

故百嶋氏が作成された「神々の系図」の絶対年代は、福岡県那珂川町にある「天之御中主神社」で、天照大神（神武天皇の姉ではあるが、当初は部下として従い、その当時の名は大日貴、神武天皇の政治的しくじりにより、女王となり名を卑弥呼に改め、最後は天照大神として崇められた）の生誕年齢を発見したことにあると述べられている。私も同社を訪れたが、そのような痕跡は認められなかったし、管見にも見あたらなかった。

故百嶋氏は、ある程度のところまで公表並びに示唆を与えてくれるものの、周囲への配慮から絶対に秘すべき事項は秘されたままである。

「神々の系図」に記されている多くの神々を中国史書と検討すると、約80年の誤差、具体的には約80年古いようである。

年代誤差を別にすると、同系図には一定の信頼性が見てとれるのは私だけではないだろう。

本論は、拙稿『大山祇神社の神々の大系』を大幅に改変、また古川清久氏主宰のブログ「ひぼろぎ逍遥」に投稿した同題論文を加筆修正した。

思えば10年前、東京都品川区大森の社宅でサラリーマン最後の夜に、夢枕に立ったのが「愛比売の女神〇〇」であった。ところが、朝起きたときはその名を思い出すことが出来なかった。のどに刺さっていた刺が、「神々の系図」によりすっきり取り除けた思いが、本論の動機である。

故百嶋神社考古学を紹介していただいた古川清久氏には、紙面を借りて感謝の意を表したい。

このはなさくやひめ その3

名古屋市 石田泉城

『古事記』の神産み神話において、大山津見神は、伊邪那岐命（イザナギ）と伊邪那美命（イザナミ）との間に生まれたとされます。『日本書紀』では、イザナギが軻遇突智を斬った際に生まれたとされますので、記紀ともに、大山津見神は、イザナギ・イザナミの子です。一方、天照大神は、イザナギ・イザナミの子ですから大山津見神と天照大神は、同世代です。

記紀の記事がともに正しいとすれば、木花開耶姫命（サクヤヒメ）らの姉妹は、大山津

見神の子であり、言い換えれば、イザナギ・イザナミを第1世代とするとサクヤヒメはその孫にあたり第3世代です。

また、天照大神はイザナギ・イザナミの子ですから第2世代であり、天照大神の天孫である瓊々杵尊（ニニギ）は、第4世代になります。するとサクヤヒメとニニギではサクヤヒメの方が一世代古いことになります。

そこで問題となるのは、一般的にはサクヤヒメはうら若き乙女のイメージですが、ニニギはサクヤヒメを「麗美人」として見初めたものの、サクヤヒメは、ニニギに比べ一世代、違うほどにお姉さんであったということになり、この世代の違いが事実とすれば、サクヤヒメは、熟女ということになります。

つまり、ニニギがサクヤヒメの子を自分の子ではないと疑ったのは、サクヤヒメが年配であればこそです。サクヤヒメが生娘であれば、ニニギがそれを疑う余地はありません。

また、姉の磐長姫は、サクヤヒメよりさらに熟女ですから、ニニギにとっては単に凶醜だけではなく食指が動かないほどの年上であったために送り返したというのではないのでしょうか。

「サクヤヒメは熟女であった」

通説のイメージを覆す結論です。



(泉城画)

【重要】会報誌の送付について（再掲）

2019年8月まで会報誌は発行時に毎月送付してきましたが、郵送費削減のため11月号と12月号は12月号発行の際に同封して送付し今後も同様とします。ご迷惑をおかけしますが今後とも会の運営にご理解、ご協力をいただきますようお願い致します。

前回の例会の内容

■ 臼杵石仏の正和四年は九州年号 瀬戸市 林 伸禧

太田重澄著『寺社考』、菊田徹著「臼杵磨崖仏周辺の石造物」、鶴峯戊申著『臼杵小鑑拾遺』、古写本『九州年号』、満月寺縁起を記した『深田記』、連城寺本の『真名野長者由来記』などの資料から、正和四年が九州年号である可能性を示した。

■ 「百嶋神社考古学」からみる古代の伊豫国（第一章） 安城市 山田 裕

百嶋由一郎作成の「神々の系図—平成12年考」から、新たな視点で古代の伊豫国を考察した。

■ このはなさくやひめ その2 名古屋市 石田泉城

糸島半島に多い「笠」姓、瓊々杵尊や木花開耶姫命を祀る神社、鹽土神社の存在からニニギとサクヤヒメが出逢った「笠紗御前」は、糸島半島の「弊の浜」（幣の松原）が妥当とした。

例会の予定

■ 例会の予定

- 1 日時 12月15日（日）13:30～（第5集会室）
- 2 場所 名古屋市市政資料館
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- 3 参加料 500円（会員は不要）
- 4 交通機関
(1) 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
(2) 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
(3) 市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
(4) 市バス「清水口」、南西徒歩8分
(5) 市バス「市役所」、東徒歩8分
- 5 駐車場 市政資料館：12台＋α収容（無料）

■ 来月の例会

11月の例会は東京八王子の大学セミナーハウスで開催の「古代史セミナー2019」に代える。

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿（編集担当：石田） furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 11月27日（水）

古田武彦先生とその学問に興味のある方など
あなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前
連絡不要、遅刻・早退もかまいません。例会で
発表する場合には資料を25部用意ください。
